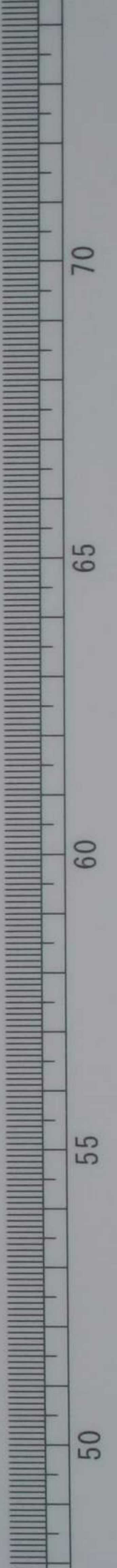


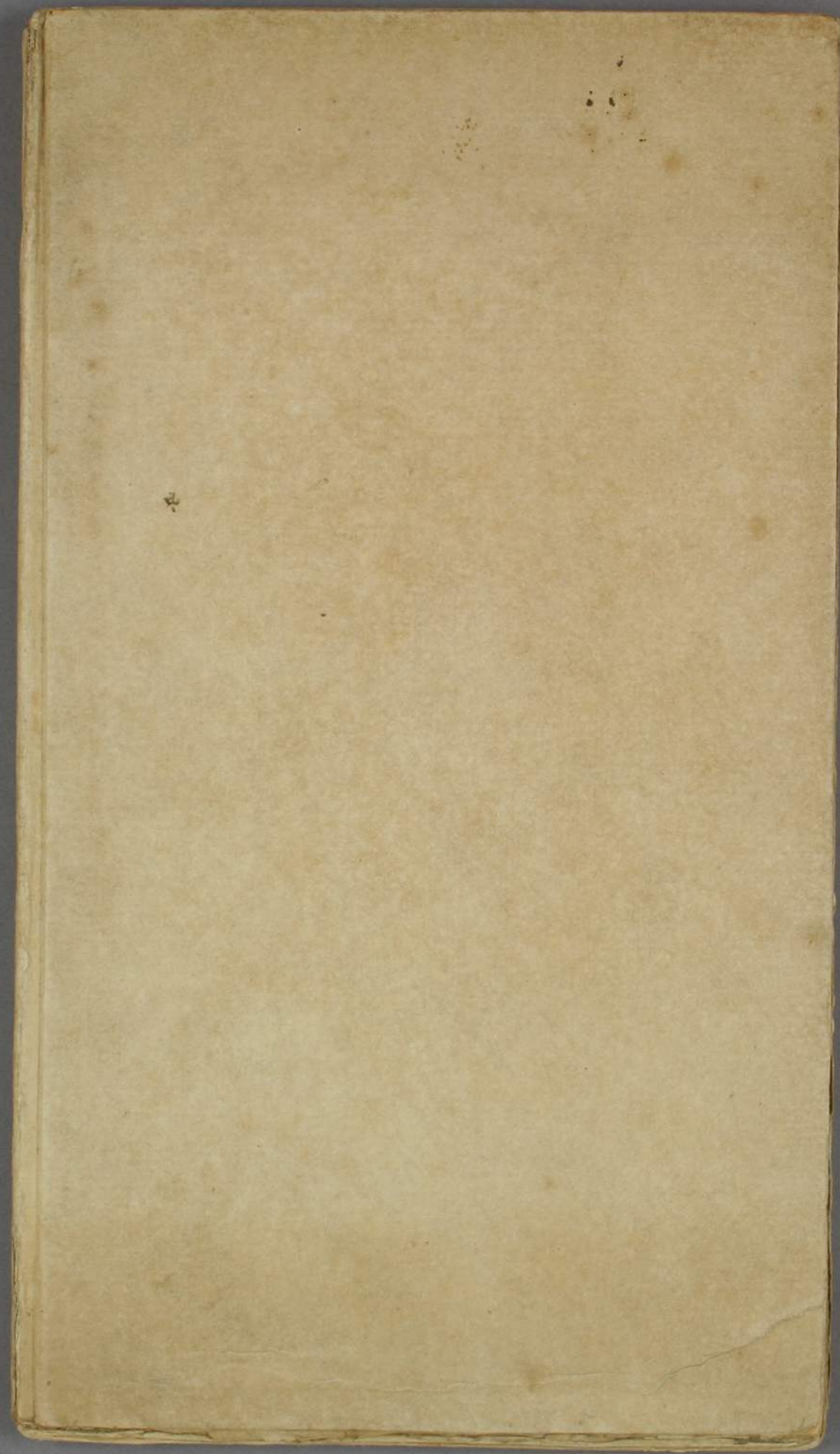
禱 祈

上田敏序

竹友藻風著







わが第一は
子献す
皇を厚知

休友厚厚
日夏詠し
ゆん

祈禱

竹友藻風



序

竹友君の詩の園生には、態とらしく、せゝこま
しい林泉の飾は無_い。こゝには寧ろ松の匂に
野花の色を添へた天然の趣が、ほのかに流れて、
愼ましく、しをらし_い清教徒の少女を憶起させ
るニウ・イングランドの後園のやうだ。蟠ない
心の華は、こゝに白く、はた赤く咲いてゐて、紫に
黄に亂れ散る矜の色も罪の影も無い。たゞ晩
秋のある晝さがり、氣温に空霞む「印度の夏」の小

春日和こゝもとを訪ひ來ると、舊世界の南國に
親む美のかんばせは、髣髴として顯れ、吹上の水
のすつくと伸びて、ちろちろと落ちくる音は、伊
太利亞の廢園にまだ残るあの聲と聞き迷ふ。
空をも貫けと立ちのぼる祈禱の叫か、地に歸り
行く安住の息か、そもそもバアンの歌か、クリス
トスの讚美か。

大正二年初夏

上田 敏

父上に捧ぐ

目次

| | | |
|----|---------|---|
| 祈 | 窓 | 祈 |
| 祈 | 眠れる人の上に | 祈 |
| 祈 | 祈 | 祈 |
| 十二 | 六 | 一 |

Rose leaves when the rose is dead.
Shelley.

| | |
|--------------|-----|
| わがたましひよ..... | 十三 |
| 水夫のうた..... | 十五 |
| 水夫のうた..... | 十七 |
| さかづき..... | 十九 |
| 祈 禱..... | 二十一 |
| 水夫のうた..... | 二十二 |
| 巡禮のうた..... | 二十五 |

祈 禱

われらまどへるトマスらは、
 つねに神の國を求めつつ、
 かくは主の側にありつつも、
 なほ神を見ずといふなり。

あはれみたまへ、主の傷手に、
指もて觸れむとする愚かなる心を、
愚かなる懷疑の叢をすぎて、
むせびつつ流れゆく祈禱の聲を。

窓

わが窓はさびし、——
眺めやる愁の牧場には、
迷へる羊のかけもみえず、
裾野にはたえず雨降り。

あはれみたまへ、かかる夜もすがら、
わが青き祈禱は窓をつたひ、

霧ふかきカナルの上になびきつつ、
大空の清き泉にあへぎゆくを。

四

晴れたる日、

わが果樹園の樹に露はしたたり、
静かなる無花果樹のかげには、
物思へるナタナエルの姿もあらむ。

わが静かなる微笑も、なげきも、
すべてかの窓にあつまるなり、

貧しき部屋の窓なれど、
主さへいま行きすぎたまふ。

五

眠れる人のうへに……

六

眠れる人のうへに、
静かなる祈禱の雨はふりそそぐ。
わが部屋に、心のうへに、
むせびつつ水はしたたる……

うす青の窓のあなたは、
月光の海の底に、

漾へる森なびく樹立、
静寂の國……

いかなれば外はしづかに晴れ渡り、
いかなればわが部屋にのみ雨は降るらむ。

七

祈
禱

わが心傷つき、わが歩のなやめるとき、
すべての人はなつかし。
わが眼は涙に濡れつつも、
微笑みて祈りてあらむ。
いつまでも祈りてあらむ、
われいかで人を誼はむ。

「わが道はすべて幸なり」と、
主よ、けふも祈らしめたまへ。
わが心傷つくとも、破るとも、
いかに宿命はつらくとも、
人いかにつれなくあらむとも、
わが道はすべて幸なり。
すべての人はなつかしく、
流れゆく日はうらがなし。

くるしむごとに、痛むごとに、
わが心は清し。

わが心傷つき、わが歩のなやむとき、
主は低く語りたまひぬ、
その聲をえこそわかたぬ、
むせびつつわれは聽けり。

また聽けり、天人の遠き嗟嘆を、
わが罪の秋の落葉を、

ふりつもるうれひの雪を、
聲もなき祈禱の言葉を。

祈 禱

小暗き聖壇の御燈みあかりのほとり。

——愛慕の雨を降りそぼつ、——

うなだれぬわが少女、

額の白さよ、

大理石のごとくさゆらぎもせてただひとり……

わがたましひよ……

わがたましひよ、愁の心よ、

遺瀨なき冬の夜も、寂しきひとりの部屋に、

いつまでも祈りてあれかし。

あはれ、いかなればうなだれてあるらむ、

いかなれば嘆くとすらむ、

かくも幸は身にあふれて、

われには望むべき寶石もあらぬを。

十四

わがたましひよ、愁の心よ、
かにかくに懷疑はかなし、
なつかしき机上の書をとぎて、
いつまでも祈りてあれかし。

水夫のうた

月の出汐のしづけさよ——
はてしなき海は眠れり。
いざ友よ、幾秋のならひのごとく、
けふもまたやぶれたる船べりに、
ほのかなる笛をふかまし。

月の出汐のしづけさよ——

十五

われらが水の墓は、
かすかなる腫をひらく。
友よ聴け、ドルフインのうたに交りて、
ながれ寄る他界の聲を。

月の出汐のしづけさよ——

水夫のうた

すべてそはいとひそやかに、
青絹のかけに逝くなり……
涙さへ出ぬまでのかなしみに、
おとろへし心のしづけさよ、——
夕さればわれらみな、蕭やかに眉を曇らせ、
されどなほ微笑みて聴けり、
はるかなる忘却の波のまにまに、

消えてゆく翅ある靴を。

さかづき

青白き光のまへに透きみゆる
玻瓈のさかづき……
そをもてる織手の人は、
ほのかなるうす絹におほはれたり。
つつましく病みたまふ額のうへに、
黒髪は狭霧のごとく……

うす青きさかづきの水は、
ひややかに眠りぬ。

たわやかなるただむきに、
つかれたるたましひを横へて、
無知の心にすかしみる
うすきさかづき……

祈 禱

曇れる蛋白石のかげに、
わが祈禱はすすり泣けり。
いづこにか、いづこにか、白き薔薇の落つるころ、
肌清き少女の逝くとき……

神よ、わが神よ、
待つはただ恵の雨なり。

水夫のうた

をさなき旅人に

I

あけぼのの雲しらみゆく
海のはて、——
水手かこはいま纜をとけり。

旅人よ、くらき世の水涯にたちて、

今日ひとり涼しきまみに、
ながみるは「生」のあなた。

ながおもひ、真珠の光、
白妙の夢の翅には、
遙かなる國をゑがき、
巡禮の旅をねがひぬ……

水手かこはいま纜をとけり。

II

さはれ、またうすれゆく意識のかげ、
その影もおぼろおぼろに、
うつし世は去りてもゆくか……

なが友は露臺にたちて、
かすかなるうたをうたへり。

巡禮のうた

水無月の野はやすし……
みちのべの花は音もなくひらき、
波の穂もしらみそめぬ。

さらばまた杖をまくらに、
かすかなる句のなかに、
けふも眠るべきか……

みよ、遠き夢の精舎に、
黄蠟の灯ともししたたり、

静かなる港の岸の
柳のもとに、
泊りする青き船——

月の出になげく小鳥よ、

うつし世の旅路のはてに、
静寂の町の夜を眺めつつ、
ひとり眠るべきか……

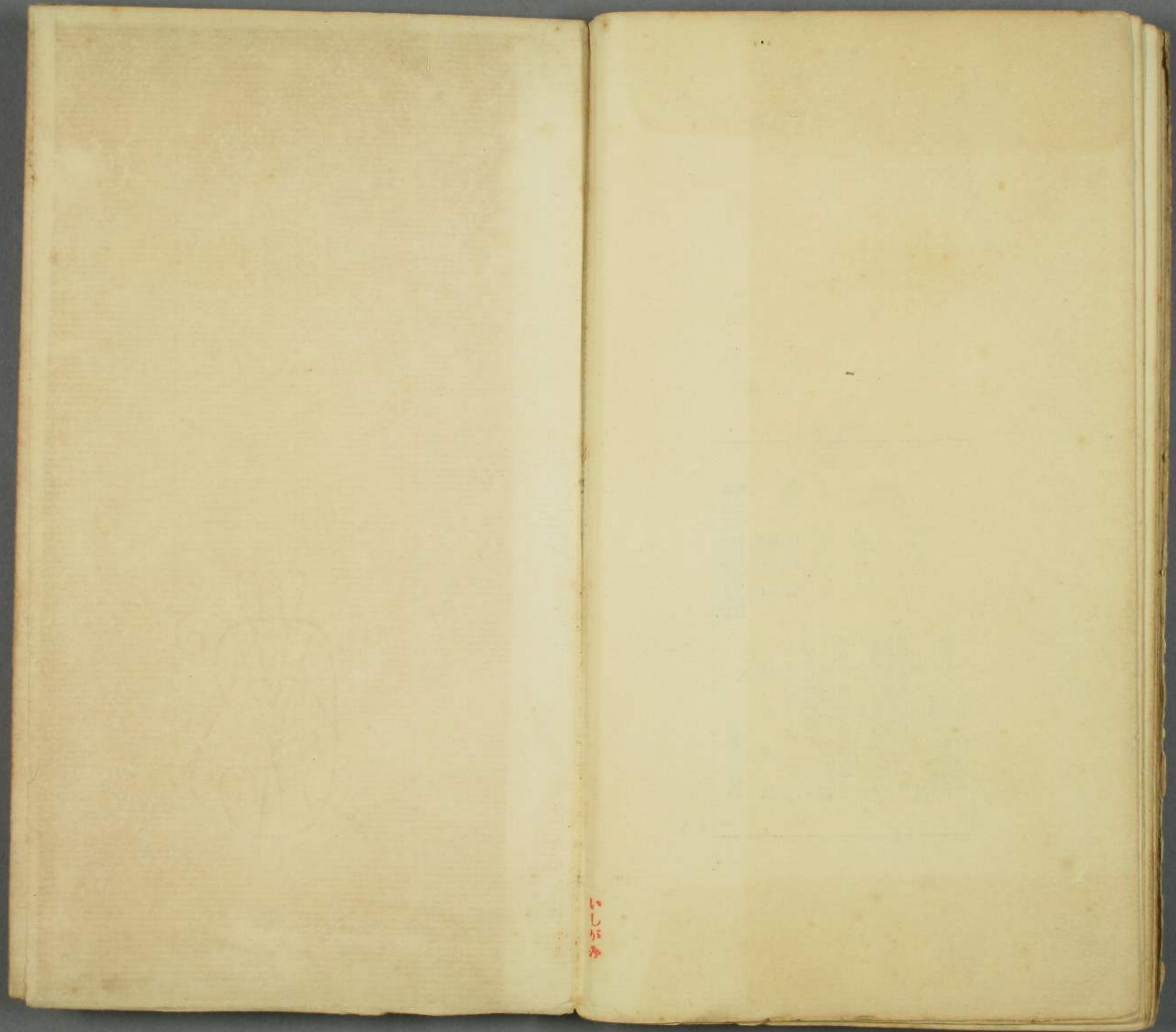


大正二年七月十八日印刷
大正二年七月二十日發行

(定價金五拾錢)

著者 竹友藻風
行作者 藤井重次郎
印刷者 四日市印刷所
發行所 東京市芝區芝公園五號地十二
發賣所 東京市東區南久太郎町三丁目
振替貯金 大正二四一七番
大正一三六八番
大正三〇八九番

東京市三條通數屋町西北角
東京市芝區芝公園五號地十二
東京市東區南久太郎町三丁目
東京市東區南久太郎町三丁目
京都府京都市東區南久太郎町三丁目
京都府京都市東區南久太郎町三丁目
京都府京都市東區南久太郎町三丁目
京都府京都市東區南久太郎町三丁目



いしがき